

蕪村『新花摘』創作意識の謎

一 『新花摘』という本

安永六年（一七七七）、蕪村は六十二歳である。天明三年（一七八三）、六十八歳で没しているのが、蕪村の晩年ということになる。この年、二月には、俳詩「春風馬堤曲」「澱河歌」を収めていることで知られている歳旦帖『夜半楽』を出版している。そして、四月には、これから問題としていこうとしている『新花摘』のための夏行に入っている。俳人として脂が乗り切った時期であったと言っていると思う。

『新花摘』、今日、月溪・田福筆写本、逸翁美術館蔵卷子本等が伝わるが、一番ポピュラーなものは、寛政九年（一七九七）に出版されている蕪村自筆本を版下とする版本『新花摘』である。

版本『新花摘』を繙くと、「新花つみ」（この部分のみ蕪村の筆ではない。跋文を記している月溪の筆である）の内に題に続いて、〈灌仏やもとより腹はかりのやど〉

復 本 一 郎

の蕪村句を巻頭に、〈早乙女やつげのをぐしはさゞで来し〉まで蕪村句（発句）百三十七句が記され、続いて、其角『五元集』にかかわるエピソード、骨董譚、狐狸譚、義士討入りを報ずる文等の蕪村俳文が並び、巻尾に月溪の跋文が置かれている。

蕪村の師は宋阿（前号、巴人）であり、宋阿の師は、蕉門の其角、嵐雪である。そのような師系から、蕪村は、其角や嵐雪に心酔していた。其角の元禄三年（一六九〇）刊、亡母三回忌（従来、序文に「四年過つる春秋」とあるので、四回忌とされていたが誤り。年忌としては三回忌である）追善集『花摘』が、蕪村の創作意欲に大きな刺激を与えたであろうことは、想像に難くない。其角『花摘』を踏まえての蕪村の『新花摘』である。

其角の『花摘』は、元禄三年四月八日より七月十九日まで、ちょうど百日間の夏行である。其角自身が序で述べているように「一夏百句」を目標とし満尾したものであった。正確に言えば、おおむね一日一発句（七月一日、

十四日は他に付句が記されているを記しているが、六月二十四日、二十五日は日付のみで、その分六月二十六日に三句まとめて記されており、そして、七月四日、五日は、日付のみで、その分、追加として末尾に「四日五日のおこたりにつきて申侍る」ということで、二句が加えられて、計百句という形式を整えている。記述の仕方、最初に日付を記し、自句を書き付けるという体裁である。時には、「その日、その夜の見聞の句々」ということで、第三者の句も書き付けられているが、今は、そのことは、あまり重要ではない。四月八日の日付に続けたの其角句へ灌仏や墓にむかへる独言からはじまり、七月十九日の日付に続けたの有明の月に成けり母の影で終っている、このごくあたりまえの体裁そのものに注目しておく。

そこで、今度は、蕪村の『新花摘』の方に目を移すと、巻頭には、先にも記したように、灌仏やもとより腹はかりのやど」の句が置かれており、明らかに其角の『花摘』が意識されているようが、日付は見えない。二句目は、
へ卯月八日死んで生るゝ子は仏であるので、読者が、四月八日の句であることを判断するのは容易であるが、其角『花摘』の整然とした体裁に比べると、なんとも妙である。ちなみに、享保二十年（一七三五）刊、湖十編、亡母七回忌追善集『続花摘』の日付の記し方は、先行す

る其角『花摘』に倣っている。

『新花摘』の日付は、句の上部に記されている。四月八日の日付は、六句目のへ耳うとき父入道よほとゝぎす」と、七句目のへ小原女の五人揃うてあはせかな」の中間の句上である。この日付、このように句と句の中間に記されているかと思えば、一句のすぐ上に記されていることもあり、何とも不徹底である。このようにして、『新花摘』の日付は、安永六年（一七七七）四月八日より、六月十六日まで、六十八日間にわたって記されている。

発句篇（と仮りに呼んでおく）の日付は、百三十一句目のへさみだれの大井越たるかしこさよ」のすぐ上に記されている四月二十四日が最後である。発句百三十七句が、この日付と何らかのかかわりがあるとすれば、この間、十七日、一日平均約八句の作品を作っていたことになる。が、日付の記載が、何としても不可解である。近時、尾形昶氏は、逸翁美術館蔵卷子本の「行頭の高さおよび行間が不揃いになっていること」に注目されて（月溪・田福筆写本には、日付の記載はない）、見事な復元を試みられているが（へ『新花摘』の原形」『文学』一九八四年十月）、そして原蕪村草稿冊子の形態は、尾形氏の復元通りであろうが、蕪村自身の日付の記載方法も含めて、いまひとつスッキリとしないのである。スッキリしない理由の一、二を述べてみたい。

まず、その一つ。尾形氏の復元に従えば、発句篇最後の四月二十四日は、「此日より所勞のためによるずおこたりがちなり。発句など案じ得べうもあらねば、いく日もいたづらに過し侍る」との一文が冒頭にあり、続けてへさみだれの大井越たるかしこさよの蕪村句、そして以下六句の蕪村句ということで、文章篇へと入っていくわけであるが、とすれば、「此日」は、当然、四月二十四日ということになる。となると「此日より」の一文の下に七句も続けることは、不自然であらうし、一文としての効果も希薄である。清水孝之氏は、新潮日本古典集成『與謝蕪村集』（昭和五十四年十一月）において、「上の日付とは無関係」と注されている。

その二。これまた尾形仿氏の復元に従えば、四月十八日は四句、十九日も四句、二十日は二句ということであるが、右に見た四月二十四日の「此日より所勞のためよろおこたりがちなり」の分言と照し合わせても、それ以前の一日の作品数としては、なんとしても少な過ぎる作品数ではなからうか。詳細に見ていくならば、このような、日付と本文とのぎくしゃくした関係は、まだまだ指摘し得ると思われるが、今は、省略に従う。

二 月溪の跋文

ここで、今までに述べてきたことの整理を兼ねて、ま

た、蕪村の『新花摘』解読への新たな鍵を見出すべく、『新花摘』に付されている蕪村の弟子月溪の跋文に目を通してみることにする。

右は、先師夜半翁自書也。翁、ひとへせ、一夏中のほ句かいつくるとて、かりそめの冊子をつくり、続花つみと題して、日毎に十章斗を記す。四月末、病のために其業いたづらに成たり。されども、六日半なるまで日並の書つけ有にぞ、其まゝにうちすて置んことはいなしとて、病や癒ての後、雲遊のむかし記得のことども、そこはかとなく書つらねて、怠りの責をふさぎ、其後は長く等閑に成て、終にそのこと止たり。翁物故の後、其冊子を解て横巻となし、聊文章の意を画て、先師真蹟の証とする。

天明甲辰夏弘生の日

月溪誌

この跋文が書かれた「天明甲辰夏弘生の日」とは、天明四年（一七八四）四月八日である。蕪村は、小稿の冒頭に記したように、天明三年（一七八三）十二月二十五日、六十八歳で没している。そして、跋文の主月溪は、臨終に待坐している。月溪が、冊子を横巻にし、しかも「右は先師夜半翁自書也」と書きはじめ、念を押すように「聊文章の意を画て、先師真蹟の証とする」と結んでいるのは、すでに諸氏が指摘しておられるように、蕪村周

辺の人物以外の何者かに譲渡したためであろう。ちなみに、月溪は宝暦二年（一七五二）の生まれであるので、蕪村が『新花摘』の夏行（げぎょう）に取り組んでいた時期は、二十六歳、右の跋文を記した折は、三十三歳である。月溪の人物について、蕪村は、天明三年九月十四日付土川宛書簡で、

月溪と申者は、至而篤実之君子にて（中略）、愚老きつと御請合申人物にて御座候。もちろん画は当時、無双之妙手ニ而候。御なぐさみ二画も被仰付可被下候。はいかいもよほどおもしろくいたし申候。横笛なども上手にて候。彼是器用成おのこにて、別而画ハ愚老も恐るゝ斗之若者ニ而候。

と、誉めちぎっている。中で、特に「篤実」なる評言に留意される。そのような月溪の執筆であれば、『新花摘』の跋文の記載内容も、信憑性があるものと見做してよいであろう。が、蕪村は、プライベートなことを必要以上には、たとえ門人に対しても、決して語らない人物であった。その出自などが、杳として謎に包まれていることも、その証左となろう。恐らく『新花摘』についても、具体的なことは何も語らなかつたのであろう。ために、月溪の跋文は、その篤実さとも相俟って、『新花摘』本文より帰納し得ること以外は、何も語っていないのである。

それでも、我々にとっては、『新花摘』という句文集の創作意識を解読するためのいくつかのヒント（実は、それこそが、月溪が、蕪村の残した本文そのものから読み解いたものであるのだが）を提供してくれているように思われる。

少しずつ目を通してみよう。まず「翁、ひとゝせ、一夏中のは句かいつくとて、かりそめの冊子をつくり、続花つみと題して、日毎に十章斗を記す」の部分である。「ひとゝせ」が、内部徴証（米俣一周忌の記載）により、安永六年（一七七七）であることは、すでに明らかにされている（志田義秀説）。月溪が「ひとゝせ」としたのは、レトリック、醜化表現であろう。安永六年、蕪村が冊子を作り、それに、『続花つみ』と題して、夏行として、毎日十句ずつを書き付けていったというのである。立ち止まらずに、先を読み進める。「四月末、病のために其業いたづらに成たり。されども、六月半なるまで日並書つけ有にぞ、其まゝにうちすて置んことはいなしとて、病やゝ癒ての後、雲遊のむかし記得のことども、そこはかとなく書つらねて、怠りの責をふさぎ、其後は長く等閑に成て、終にそのこと止たり」の部分である。蕪村の『新花摘』は、四月二十四日の日付の下に書かれたへさみだれの大井越たるかしこさよ以下六句で発句篇が終っている。それを、月溪は、病のためのやむをえざ

る所為であると説明している。ところが、『続花つみ』と名付けられた冊子（ノート）には、前もって日付けが、尾形仿氏の復元を参照しつつ言うならば、一ページごとに、各ページの上部中央に、六月十六日分まで記されていたというのである。それで、回復後に、記憶している行脚体験を綴って、一冊を埋めた、というのである。最後の部分、「其後は長く等閑に成て、終にそのこと止たり」は、唯一、月溪の私見であるが、どのようにも理解し得るきわめて曖昧な表現である。後に考えてみたい。

三 月溪跋文の問題点

月溪の篤実なる性格（蕪村も認めていた）からして、事実の不明瞭な部分を糊塗したり、脚色したりすることは考えられない。逆に言えば、月溪は、『新花摘』執筆に関して、蕪村から何も聞かされていなかったのではなからうか。そして、月溪自身も、何の情報も持ち合わせていなかったのではなからうか。月溪の前には『続はなつみ』と題された一冊のノートが残されたに過ぎないのである。右に見てきた月溪の跋文は、総て、前にも指摘しておいたように、『新花摘』本文から帰納し得ることばかりなのであり、そのために、いくつかの疑点も生じてくるのである。それらを指摘したい。

まず、書名である。月溪の跋文には『続花つみ』と見

える。版本の題簽は『新華摘』であり、内題は『新花つみ』である。これは、もともと、月溪が「横巻」（巻子本）とする前の、冊子（ノート）には、『続花つみ』と記された表紙が付けられていたのであろう。無論、其角の『花摘』を意識しての命名と思われる。江戸座に関心を持っていた蕪村が、先にも少しく触れた、享保二十年（一七三五）に刊行されている江戸座の代表俳人湖十の『続花摘』の存在を知らなかったはずはない。が、そんなことは、草稿ということもあり、意に介さなかったのであろう。それを、月溪が「横巻」とした時、巻頭に「新花つみ」と記したのではなからうか。巻頭内題の「花」の書体と、月溪跋文中の「続花つみ」の「花」の書体が酷似している。月溪は、湖十の『続花摘』との抵触が気になったのかもしれない。あるいは、芭蕉七部集の一つ『続猿蓑』が、芭蕉当時よりすでに『後猿蓑』とも呼ばれていたように、月溪は、させる意識もなしに「新花つみ」と記したのかもしれない。版本の題簽「新華摘」は、出版に当って後人がしつらえたものであろうというわけで、書名の揺れは、疑点というほどのものではない。

それよりも、蕪村が自らに一夏中、毎日十句の発句を病の日まで課したという指摘である。これも、尾形仿氏の復元冊子図を参看すると、四月八日より十二日の日付

までの五日間は、毎日十句を厳守している。尾形氏は、初日の四月八日を九句とされるが、九句目のへ白がねの花さく井出の垣根哉に並べて、上五文字を省略してへ（白がねの）うの花も咲や井出の里」と記されている異形句を数えられていないからで、これを加えれば、ちょうど十句である。毎日十句の夏行を志して、とっぱなの初日に九句というのは、いかんせん不自然ではないか。無論、冊子に毎日十句を直接書き付けていったものではない。あるまい。さらに下書きのノート風の句稿があり、そこからセレクトして（一日十句以上の日も当然あったであろう）、あるいは推敲を加えて、『統花つみ』と名付けた冊子に一日十句ずつ書き移していったのではなからうか。とにかく月溪が「日毎に十章斗を記す」と述べている事項も、本文から帰納し得るのである。ただ、十三日の日付以降の日付と句数のズレを、月溪はどのように理解していたのであろうか。

次に、これこそが最も大切なのであるが、「四月末、病のため其業いたづらに成たり」の指摘である。これも四月二十四日の日付の下に記されているへさみだれの太井越たるかしこさよの句の前に見える「此日より所勞のためによろづおこたりがちなり。発句など案じ得べうもあらねば、いく日もいたづらに過し侍る」の記述より簡単に帰納し得る指摘である。月溪は「所勞」を「病」

と解したのである。それ故、この見方とは別に、今日、この「所勞」に、清水孝之氏のように、この間の蕪村の娘くの離婚問題による「精神的打撃」を見ようとする見解（前掲書参照）も、当然、生まれてくるのである。なお、続く「されども、六月半なるまで日並の書つけ有にぞ、其まゝにうちすて置んことはいなしとて、病や癒ての後、雲遊のむかし記得のことども、そこはかとなく書つらねて、怠りの責をふさぎ」の部分にしても、冊子『統花つみ』本文から一つ残らず帰納し得るのである。そして、それ故に、また新たな疑点を生じてもくる。もし蕪村の『新花摘』（『統花つみ』）が、一夏の夏行のために行われたものであったとすれば、前もって冊子に日付を記しておくにしても、それは、当然、其角の『花摘』のように百日間、七月十九日まで記された空白の冊子が残っていないといけないはずであり、現存する『新花摘』のように六月十六日まで、六十八日間の日付というのは、何の意味も持たないことになるのである。「六月半なるまで日並の書つけ有にぞ、其まゝにうちすて置んことはいなしとて云々」は、「篤実」な月溪が、空白のまま破棄されたであろう六月十七日より七月十九日までの部分を考慮せずに、見たまんまの冊子『統花つみ』を報告しているに過ぎないのである。——私は、「此日より所勞のため云々」は、事実は事実であるものの、

『新花摘』を句文集とするための効果をも十二分に狙ったすこぶる文学的な文言であると思つてゐる。一日十句の夏行が滞つたのを逆手にとつて、『新花摘』の方向転換を図つたのである。以下この期の蕪村書簡に目を通しつゝ、私見を述べてみることにする。

四 夏行中断を伝える蕪村書簡

安永六年（一七七七）五月二日付某宛（清水孝之氏は几童か、とされている）書簡は、『新花摘』中の作品九句を列挙した後で、

右の句ども、此ほど夏行也。さてく多用ニ而、最早百句ほどの未進ニ相成候てこまり申事ニ候。貴句いかゞ。

皐月二日

と記している。これによつて、安永六年の夏行の中断の事実がはっきりと浮び上ってくる。もう一つ、今度は、安永六年夏と推定されている几童宛の書簡を見てみよう。旧作三句とともに『新花摘』中の五句が見えることから推定である。尾形仇氏の復元に従えば、中で一番日付の下る句は、夏行中断の一日前の四月二十三日の日付のページに見えるへ兄弟のさつを中よきほぐしかなでである。書簡を繙くと、

扱も御うとくしく候。やゝ暑ニ向ひ候。（中略）

むすめ病氣、又々すぐれず候て、此方へ夜前引取養生いたさせ候。是等、無抛心労どもニ而、風雅も取失ひ候ほどニ候。老心御照察可被下候。（下略）

冒頭の「やゝ暑ニ向ひ候」に注目するならば、そして日付と作品制作時が一致するとするならばなおのことであるが（私は、多少疑問がある。後述する）、夏をさらに限定して、四月中の書簡と見てよいであろう。内容に目を通す前に、もう一つの書簡を見ておこう。安永六年（一七七七）五月二十四日付正名・春作両名宛書簡である。

愚老も只く画ニせめられ候へども、日々疎懶ニ打くらし、筆ヲとり候事甚うとましく、それ故、画もはかどり不申、びんぼう神の利生いちじるく、有がたく奉存候。（中略）むすめ事も、先方爺々専ラ金もふけの事ニのみニ而しほらしき志し薄く、愚意ニ齟齬いたし候事共多く候ゆへ、取返申候。もちろんむすめも先方の家風しのぎかね候や、うつく病氣づき候故、いやく金も命もありての事と不便ニ存候而、やがて取もどし申候。

再度にわたつて娘ぐのを婚家先から呼び寄せて、離婚ということになったのである。蕪村自身が「是等、無抛心労どもニ而、風雅も取失ひ候ほどニ候」と述べる通りである。『新花摘』中の四月二十四日の日付の前に見え

た「此日より所^{しよ}勞^{らう}のためよろづおこたりがちなり」の一文の「所^{しよ}勞^{らう}」を「心^{しん}勞^{らう}」に重ねることも可能であろう。ここに、先に紹介した清水孝之説が大きくクローズアップされてくるのである。月溪はどうも「所^{しよ}勞^{らう}」なる言葉を「病」に短絡させてしまったようである。が、「所^{しよ}勞^{らう}」「心^{しん}勞^{らう}」は、娘の離婚問題ばかりでなく、これも、蕪村自身が正名・春作宛書簡に記しているように、画業が思うように進捗しなかったということも、その一つとして挙げられよう。大変な注文量をこなしていかなければいけないのである。何のために。生活のためである。安永七年（清水孝之説）四月二十九日付、黒柳清兵衛宛の蕪村書簡に「其ひまつぶしを画の方^て而精を出し候へば、大ニ利益有^れ之候事ニ御座候」と見えるように、画業に励めば、「びんぼう神」から逃れることができたのである。安永六年夏には「一路寒山図」「砧槌自画賛」「富嶽松林図」等を完成させており（『蕪村事典』桜楓社、所収の田中善信氏稿「絵画一覽」参照）、その上、なおかつ「画ニせめられ」という状況下にあったのであろう（本章の冒頭五月二日付某宛書簡中の「多用」の言も、そのことを窺^み知^ちせしめるであろう）。多忙が蕪村をして心的に「疎^そ懶^{らん}」の状態に向かわせたのであろう（拙著『笑いと謎』角川選書、所収「蕪村の「懶」の世界」参照）。蕪村言うところの「所^{しよ}勞^{らう}」、あるいは「心^{しん}勞^{らう}」に

は、娘^この離婚問題のみならず、山積する画業からくる「疎^そ懶^{らん}」もかなりのウェイトを占めていたと言っているであろう。

プロの俳諧師蕪村にとって、一日十句を作ることは、さほど困難なことではない。事実、今日の版本『新花摘』に見られる最後の日付である（逸翁美術館蔵卷子本も同様である）安永六年（一七七七）六月十六日の日付の直後の日付である六月二十七日付霞夫宛蕪村書簡には、「愚享此ほどは百句立^{だて}発句に而^ておもしろき事に候」との文言が見えるのである。清水孝之氏によれば、「百句立^{だて}発句」とは、約四時間で百題百句を作る多作法とのことである（前掲書参照）。ところが、夏行としての『新花摘』執筆中のある時点から、一時的に、「多用」による「所^{しよ}勞^{らう}」「心^{しん}勞^{らう}」のため、制作意欲がなくなってしまう、放^{はな}擲^{てき}してしまつた、というのが真相であつたと思われる。一日十句の夏行^{げぎやう}を放^{はな}擲^{てき}しつつ、別のこと、すなわち句文集というものを企図していったのであろう。このあたりが、さすが蕪村である。

そこで、先に掲げた、某（几^{きよ}童^{どう}か）宛安永六年（一七七七）五月二日付蕪村書簡に注目してみよう。そこには、「最早百句ほどの未進」と見えた。五月二日で、百句が滞^{とど}つたというこで、一日十句であるから、十日分、これを逆算していくと、滞^{とど}りのはじまつた日が浮び上って

くるわけである。書簡は、ほぼ事実を伝えていると判断してよいであろう。と、すると、安永六年の四月は大の月であるから、四月二十三日という線が出てくる。四月二十三日から五月二日まで、先に述べたような理由で作句を放擲してしまったというのである。

五 結論に向って——一つの可能性

ここで、一つの実験を試みることにする。放擲するまで一日十句を厳守したとして、蕪村『新花摘』中の句は、四月八日から何日分あるかということである。先に述べたように句の上部に記されている日付と十二日までは一致するわけであるが、以下、日付を一まず無視して、一日十句として数えていくのである。すると、四月二十日まででは一日十句、四月二十一日が端数の七句という結果が出て、先程からしばしば問題となっている「此日より所労のためよろづおこたりがちなり。発句など案じ得べうもあらねば、いく日もいたづらに過し侍る」の部分は、四月二十日分の十句の直後に位置することになり、これが二十一日分の記述とすると、最後の七句は、「いく日もいたづらに過し」、最後の力を振り絞っての七句、しかしついに中断、そして気分も新たに文章篇へ移行、という構成が読めてくるのではなからうか。

私には、夏行一日十句が、そう簡単に、はじめてから

四、五日で崩れるとは思われない。「百句立発句」をもこなす蕪村である。それでは、尾形仇氏が復元された冊子の句数に、なぜ途中からばらつきが出てくるか、ということになるが、下書きのノート風の句稿から、現在、版本から窺知し得るとき冊子へと写しかえる時に、徐々に文章篇制作への思いが募り、上部の日付が無視されていったのではないかと思っている。

蕪村は、再度、清書して刊行する心積りでいたのである。その折には、其角の『花摘』のように（そして湖十の『続花摘』のように）、まず日付が記され、その後毎日に十句ずつが記されている、という整然とした形式が踏襲されていたであろうと思われる。四月八日より四月二十日まで、きちんと十句ずつ、そして、二十一日に「此日より所労のためよろづおこたりがちなり。発句など案じ得べうもあらねば、いく日もいたづらに過し侍る」の文言、さらに数日おいて、某日、氣力を振り絞っての七句、しかし力尽きて中断、後日、文章篇へ移行——こんな体裁の『新花摘』が出来上っていたかもしれないのである。月溪が跋文で「其後は長く等閑に成て、終にそのこと止たり」と記しているのは、残された「続花つみ」と題された冊子に、そのようなことを感じての発言であったのではなからうか。しかし、実際には、必要あって（遺族の金銭援助であらう）、月溪の挿絵を加

え、「横巻」にして、第三者に譲渡してしまつたのであつた。もし、蕪村が、『新花摘』を句文集というユニークな文学作品として公刊する意志がなかつたとしたら、わざわざ「此日より所労のためよろづおこたりがちなり云々」などと書かずに単に、夏行を放棄してしまえばよいのである。手の内を明かしつつ、文章篇へと方向転換するという見事な文学的構成が採られているのである。そして、ひょっとしたら、これは、其角『新花摘』の追加に見える「四日五日のおこたりにつきて申侍る」との処置などがヒントとなつていたのかもしれない。

それにしても計算し尽された、見事な結構の文章篇の多くの部分を狐狸譚が占めているのであるが、蕪村の好みとして、本来、そのような側面があつたことも勿論であるが、これも、また、其角の『花摘』下巻六月十八日の条に記されている、

伊勢の国にて、狐の人につきて云出ける句

仁あれば春も若やぐ木目哉

此狐つき日此の田夫にてぞ有ける。狐にて後は無筆なりしと也。其筆跡正しう狐にて侍れば、歌にあやしう、たえなるためしにもと書付侍る。このエピソードが蕪村をして、文章篇への創作意欲をかき立てしめたとも考えられるのである。

なにはともあれ、蕪村に一冊の句文集『新花摘』が残

されていなかったとしたならば、蕪村の俳句世界は、我々にとってかなり味気ないものになつていたのであろう。

※「俳句あるふあ」（毎日新聞社）創刊号の拙稿へ蕪村をめぐる女たちを参照いただければ幸甚である。本稿と補い合っている。